

さよなら、

スーおじさん



小林陽子作

木村ひさえ絵

「タク、タク、おきなさい、おばさんたちついたわよ」

母さんの声におこされた。

なんだ、スーおじさんの顔を見ていたら、自分のほうが眠ってしまったんだ。

スーおじさんは、ふとんにねたまま眠ってるんだか、目だけつぶってるんだか。

おじさんはまだ五十前だけれど、おじいさんみたいに年とってみえる。ほおほこけ、口のまわりには、しらがまじりのぶしょうひげがはえている。

タクは小学三年生。おじさん、おばさんたちがやってくるのを、ゆめのなかのような気がしながら、見ていた。

「タクちゃん、ちょっとみないうちに、大きくなっただわね」  
正子おばさんが雨のしずくをハンカチではらいながら玄

関をはいってきた。

「あいにくの天気ですね」

父さんが、正子おばさんのコートをうけとった。

「こんにちは。おばさん、アキちゃんは？」

タクが一歳上のいとこのアキラのことをきくと、

「きたわよ。タクちゃんに会うのたのしみで、やめなさい、  
っていうのに、ゲームまでもってきたわ」

おばさんのあとから、アキラがふくらんだ手さげぶくろ  
をタクにみせるようにもちあげて、はいつてきた。

タクは、ゲームソフトと思いついて入っている正子おばさんを  
そのままにアキラをむかえた。

そのあと大介おじさん、奥さんのみゆきおばさんとつづ  
いて、これできょうのメンバーは全員そろった。